

名古屋陶磁器に関する基礎データ

Basic Data about "Nagoya pottery"

●古池嘉和／富山大学芸術文化学部

KOIKE Yoshikazu / The Faculty of Art and Design, University of Toyama

● Key Words : Nagoya, Pottery Industry, Overglaze decoration

要旨

日本が近代化する過程において、様々な産業が興り、その盛衰を物語る諸資源が今日に受け継がれている。それらの中には、近代化遺産として、その利活用が模索されているものも多い。

本稿で取り上げている名古屋陶磁器^{*1}においても、拠点となる「名古屋陶磁器会館」は、登録有形文化財として、名古屋陶磁器の展示や講座の開催、映画のロケなどに活用されている。しかし、かつてその周辺にあった、陶磁器（関連）産業自体は、すっかり影を潜め、それに伴い多数の職人（技）は、消えつつある。そこで、本稿では、往時の産業を偲ぶ文化遺産と言える職人（技）の現状を、断片的な資料として整理し、近代化遺産の活用に向けた手がかりを提示したい。

1. 輸出陶磁器のマクロトレンド

最初に、日本の輸出陶磁器に関するデータを概観しておきたい。

1.1 日本経済を牽引した輸出陶磁器

日本陶磁器産業振興協会（JAPPI:Japan Association for the Promotion of Pottery Industry）のHP^{*2}によれば、「1919（大正 8）年には、名古屋港の陶磁器輸出 7.3 万トン（59.8%）、1966（昭和 41）年の陶磁器輸出は、102.6 万トン（29.1%）で、この間、名古屋港では陶磁器が第 1 位」であったと記されている。

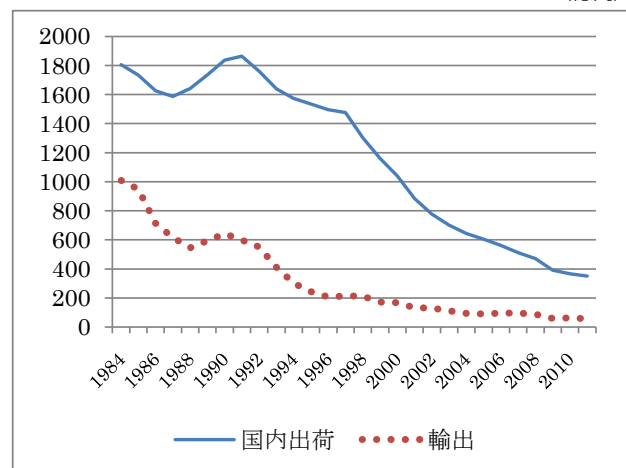
今日では、例えば、2010 年の「取扱貨物」の上位は、「完成自動車（47.6%）」、「自動車部品（19.1%）」となっており^{*3}、輸送機器関連の積出港としての印象が強い。かつての陶磁器の積出港は、その座を輸送機器に明け渡したことになる。その状況をさらに加速したのは、1985 年の「プラザ合意」以降である。次に、その詳細を見ておきたい。

1.2 「プラザ合意」後の状況

日本における輸出産業は、1985 年の「プラザ合意」後の円高局面で大きく変わっていった。陶磁器産業も同様

に、この時期を境に大きく低下していくこととなる。図 1 は、陶磁器製食器における推移を示したものであるが、プラザ合意前の 1984 年に 1,009 億円であった輸出額は、翌、1985 年以降の急速な円高局面において、右肩下がりでも推移していく。全体の需要が増えた「バブル経済期」に一旦上向くものの、その後は急速に低下し、1999 年には 172 億円と 200 億円を割り込む。さらに 2011 年には 57 億円と対 1984 年比 5.6% にまで減少し、陶磁器食器の輸出は大きく落ち込むこととなった。

(億円)



(出典：財務省 貿易統計)

図 1 「プラザ合意」後の輸出陶磁器の推移

2. 名古屋陶磁器の現状

2.1 概況

名古屋は、瀬戸、美濃など国内を代表する陶磁器の産地を背後に抱え、近代になると、その集散地としての役割のみならず、生産機能を垂直統合する形で、規模を拡大していった。その原動力となったのが、国外への輸出である。

とりわけ、1904（明治 37）年に、森村組が日本陶器を設立すると、「経営規模がそもそも大きかった名古屋陶磁器業に、他と隔絶した「成長」という要素を与えた^{*4}」機械制大工業が実現した。

森村組は瀬戸の窯元から生地を購入し、名古屋で上絵付けを施していく仕組みを導入した。こうして名古屋と瀬戸の間に、問屋の生産工程への垂直統合を伴った、広域的分業体制が出来上がったのである。

さらに、生地の生産地である山間から港までの流通経路として、陸路、水路が活用され、名古屋市内では陸路から「堀川」を使った水路へと切り替わっていた。名古屋市の北東部（北区、東区など）に陶磁器関連の業種が集積してきたのも、こうした流通経路における地理的な要因が大きいと考えられる。

2.2 名古屋絵付けの蓄積

このような近代化の過程の中で、一世を風靡した名古屋の陶磁器産業は、とりわけ生産工程の中で、上絵付け^{*5}工程を中心に担うこととなり、久谷や京都などから名古屋に絵付け職人が集まり、輸出に向けて様々な種類の製品が作り出された^{*6}。

歴史的に見ても、瀬戸街道（陸路）で繋がっている名古屋市東区は、元々、絵付けが盛んではあったが、その中心となったのは、「やや南側の鍋屋町あたりの普通の町屋」であった。それが、生産規模の拡大によって、「区画の大きい榎木・主税・白壁あたりに移った」のである。そして、松風陶器（支店）などのような大規模な上絵付け業者も出てきた。

その中で、デコ盛り、金盛り、久谷風、西洋花絵などの技法や、それらを融合したものなどが、様々な創意工夫によって生まれてきた。それらを総称して「名古屋絵付け」と呼ぶことができるが、そうした技法は、生産量の増加に伴って地域内部にも浸透し、絵付け長屋などが生まれてくる。だが、逆に、生産量の激減に伴って、これらの資源は、地域から姿を消していくこととなる。



図2 デコ盛りの作品例



(出典：名古屋陶磁器会館)

2.3 現状と課題

これまで見てきたように、名古屋陶磁器は、大正期には、

機械制大工業による隆盛期を迎え、「プラザ合意」後には、その生産量は激減していく。それに伴って、職人の仕事も減少し、かつて名古屋陶磁器を支えてきた職人も高齢化によって、その技を傳承することなく姿を消していく。

筆者は、図2の作品を制作した松岡氏の自宅兼工房を2010年12年に訪れた。そこは、名古屋市内の団地の一室であり、その一つの部屋が作業場となっていた。団地の外観からは、ここから未だにこうした技法を活かした作品が生まれていることは容易に窺えるものではない。外部から決して見えない場所に技が生きていた。だが、残念なことに、その貴重な技法も筆者の聞き取り調査の後、氏の死去に伴って消えてしまった。

聞き取りの際に、「職人は、長い熟練が必要であり、これは、私一代限りで受け継ぐ人などいないよ^{*7}」と語っておられたが、熟練の技は、社会的、経済的な環境条件とともに、傳承の仕組み自体を考えていく必要がある。

一方、企業の方もその数は激減している。名古屋陶磁器に関して、それを裏付けるデータは、中々、入手が困難であるが、例えば、かつて輸出陶磁の中でも大きなウエイトを占めていた「置物」の生産量のデータを見てみると、愛知^{*8}では2000年以降、極端に減少していることが分かる。

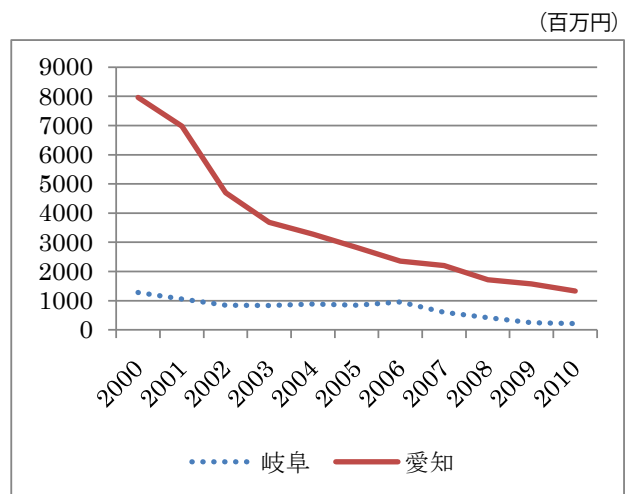


図3 置物の生産状況 (出典：財務省 貿易統計)

一方、生産量の減少から見て、名古屋陶磁器の輸出に関連する企業も、同時に減少していると考えられる。日本陶磁器輸出組合「四十七年史」によれば、その組合員数は、表1のような推移を示している。そこからは、「陶磁器の輸出取引における秩序維持に関する協定」を実施した1964年を画期として会員数が増加し、1970年代前半の組合員数は500を超えていたが、1985年の「プラザ合意」後は、減少の一途を辿り、1996年には、その数が200を下回るようになり、ついに1999年3月31日に日本陶磁器輸出組合は解散することが読み取れる。

2.4 文化資源を活かす取り組み

このように産業としては衰退してしまった名古屋陶磁器ではあるが、企業が集積していた東区界隈には、陶磁器を始め近代産業を支えた痕跡を色濃く残す資源が現存している。

表1 日本陶磁器輸出組合員数の推移

年次	組合員数	1975	507
1952	223	1976	497
1953	222	1977	496
1954	228	1978	477
1955	256	1979	459
1956	267	1980	453
1957	270	1981	448
1958	255	1982	448
1959	265	1983	443
1960	269	1984	446
1961	312	1985	431
1962	338	1986	405
1963	397	1987	390
1964	472	1988	377
1965	489	1989	362
1966	507	1990	348
1967	520	1991	338
1968	513	1992	322
1969	524	1993	288
1970	521	1994	254
1971	519	1995	218
1972	523	1996	194
1973	525	1997	158
1974	522	1998	140

(出典：日本陶磁器輸出組合「四十七年史」より)

それらは例えば「文化のみち榎木館⁹⁾」、「旧豊田佐助邸¹⁰⁾」などであり、その内部は見学ができるようになっている。また、これらの資源をネットワークし、面的な魅力を発揮するために、「歩こう!文化のみち¹¹⁾」などの政策

が実施され、とりわけ資源の集積度の高い「白壁・主税・榎木」地区は、町並み保存地区に指定され、景観が保全されている¹²⁾。

さらに、町並み保存地区を含む広域的なエリアを「文化のみち」として、市では、その界隈に残る歴史的建造物を保存・公開している。その起終点になっているのは、名古屋城と徳川園であり、その間のエリアに散在する、前近代・近代化遺産をネットワークした界隈形成を目指している。こうした流れの中で、これまでは、建築・町並み資源の保全・活用が政策の中心であったが、その間、産業に纏わる諸資源が減少しており、建築資源の保全に依存した界隈の価値形成には限界が見えてきた。

そこで、近代化の過程の中でこの界隈の生産を支えた陶磁器文化に注目した「文化のみち」の再生に向けた動きが活発化し、その一環として、2011年より文化庁の補助事業による再生事業が動き出した¹³⁾。

それは、界隈に残る資源を手がかりとした地域再生を目指すものであるが、その事業の一環として、まず、現存する職人の実態調査を行うこととした。

3. 職人技の現状と課題

3.1 現状

名古屋陶磁器の職人の実態を、正確に把握することは中々に困難である。今日では、職人技は、例えば「ノリタケカンパニーリミテド(以下、ノリタケ)」など個別企業の内部で継承されてはいるものの、絵付けを業としている職人を界隈(=地域)の中に見出すことは難しい。また、ノリタケ自体も、既に、東区から西区へと本社を移転しており、そこには「ノリタケの森」を併設し、陶磁器の産業的・文化的な拠点施設になっているが、残念ながら、東区にはこうした拠点企業(施設)がなくなっている。さらに、企業内部の職人についても、企業が抱える職人のデータは企業秘密の部分が多く、その実態を把握することは難しい。

そこで、名古屋陶磁器に関連する職人の実態を明らかにする手がかりとして、名古屋陶磁器会館が掌握している職人のデータを纏めたのが表2である。そこで把握できるのは、現在、絵付け(11名)、原型(1名)、ゴム判(1名)の合計13名であった。但し、筆者が2010年12月に聞き取り調査を行った職人さん(先述)も、既に他界されており、その数は年々減少していくことが懸念される。

その後、名古屋陶磁器会館が、独自に聞き取り調査を行った結果、追加的に4名の絵付け職人の方々の存在が判明した(表3)。なお、すべての了解を得ていない関係上、個人名はすべてイニシャルで表記している。

次に、職人の実態であるが、類推する手がかりのひとつ

表2 職人リスト (1)

	氏名	技法
1	H.T	二重盛り竜
2	A.Y	金腐らし
3	T.A	油絵風
4	N.H	油絵風
5	M.U	盛り
6	I.K	油絵風
7	T.Y	油絵風
8	S.K	不明
9	M.K	油絵風
10	H.K	油絵風
11	T.Y	不明
12	M.H	原型師
13	A.Y	ゴム判師

(出典：名古屋陶磁器会館調べ)

表3 職人リスト (2)

14	F.K	絵付け (一級上絵付技能士)
15	H.I	絵付け
16	M.T	絵付け
17	K.I	絵付け

(出典：名古屋陶磁器会館の聞き取り調査より)

として、昭和28年から60年度まで、「名古屋輸出陶磁器協同組合(昭和24年設立、平成14年解散)」が開催していた「名古屋陶磁器上絵付技術コンクール」がある。当時は、各企業から職人を推薦し、盛んに技を競っていたようだ。例えば、昭和33年度(第6回)を見てみると、「上絵付技師(第壱部)」と「意匠図案(第貳部)」に分かれているが、上絵付部門においては、「無審査2名、特選2名、一席3名、二席4名、三席13名、佳作18名」と多数が受賞しており多くの職人が活躍していた様子が窺える。

3.2 聞き取り調査

次に、実際に、職人さんへの聞き取りを行った。その結果を、簡単に報告しておきたい。

3.2.1 金腐らし職人 (A.Y)

2012年8月29日に名古屋陶磁器会館にて、聞き取りを行った。氏は、1919(大正8)年に、本社を瀬戸から名古屋に移転させた「瀬栄陶器(後の瀬栄陶器株式会社)」等に在職し、約40年にわたって陶磁器食器・ノベルティー

などの絵付け、デザイン商品開発に従事していた。そこで、「手描き、吹付け、金線仕上げ、金筋、転写貼り、ニス貼り、水貼り、ゴム印での金、銀、絵具のスタンプ、ラスター塗り、金盛りなど多種多様な技法を習得した。退職後は、後世にその技法を伝えるべく、図4に示すような作品を制作している。



(出典：名古屋陶磁器会館)

図4 金腐らし*¹⁴「唐獅子牡丹絵」花瓶

3.2.2 二重盛り(竜)職人 (H.T)

2012年8月30日に、自宅兼工房を訪れた。松岡氏と同様に集合住宅の一室が作業場となっていた。二重盛りという技法を有する職人である。図5に示すように、作業姿は、正座してクッションをのせ、その上に生地を置き、イチンと呼ばれる道具で、黙々と竜を描いていく。仕事中は常にその姿勢を維持しなければならず、それ自体忍耐のいる作業である。氏によれば、「生地に対して、直接、描いていけるようになるまでには、長い下積みを経験しなければならなかった」そうである。聞き取りからは、熟練の職人になるための徒弟制度の必要性を強く感じたが、その仕組みを時代に合わせた形で取り入れ、熟練の技を継承していくことが必要となる。



図5 二重盛り技法 (H.T)

(出典：名古屋陶磁器会館)

おわりに

さいごに、本稿の意義と課題を整理しておきたい。これまで示したとおり、名古屋陶磁器の人的資源は、その技法を有した職人の高齢化とともに、減少の一途を辿っている。現在、行うべきことは、第一に、その技法等を後世に伝えるために、可能な限り多くの資料やデータを保存することである。本稿はそのための手がかりとなるものである。

第二に、地域の歴史を踏まえ、そこで蓄積した資源を生かしていくことで、文化資源とまちづくりの接点を見出すことである*¹⁵。勿論、産業としての名古屋陶磁器が、これまでのような形で蘇生することは現実的ではない。だが、近代化の過程で興隆した産業の記憶を遺伝子として捉えるならば、それらを資源として評価し、新たな形で界限再生に活かすこともできる。

最後に、工芸や建築・町並み資源を活かしつつ、新たに消費と創造（生産）の循環の仕組みを入れ込むことで、現代における“生業”と、それを支える現代の職人を育成することも可能になろう。そのためには、基礎となる資料をより一層充実させていくことが必要となるが、この点は今後の課題としたい。

注釈

- * 1 名古屋陶磁は、器類に限ったものではない。そのため、正確には、「名古屋陶磁」と標記すべきであるが、施設名が名古屋陶磁器会館であり、また、区分の厳密性を問うことが趣旨ではないので、本稿では、「名古屋陶磁器」として統一した。
- * 2 JAPPI (<http://jappi.jp>)
- * 3 名古屋港を管理している名古屋港管理組合 HP (http://www.port-of-nagoya.jp/port_of_nagoya/index.html) より
- * 4 宮地英敏 (2008) 『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会より
- * 5 絵付には、素焼き後、釉薬をかける前に絵付けする下絵付け (underglaze decoration) と、本焼きの後、釉薬の上から絵をかく上絵付けの二つの段階がある。
- * 6 田村 (2008) によれば、名古屋における絵付師の集積過程を以下のように説明している。

「孫兵衛らが陶磁器製品の買い付けに回った生産地は完成品に仕上げる絵付師の所であり、港町を中心とした都市部であった。それは、東京、横浜、静岡、名古屋、京都、大阪、神戸、加賀（石川県）、肥前（佐賀県）などで、商品を直接注文し、製品の元となる生地の確認と買い付けも含めて東奔西走していたため、効率的な出荷方法ではなかったの

ある。量産には極めて非効率な現状下、効率的な商品の発注と確認、製品の獲得における時間短縮のために国内各所の名画工と専属契約を締結、さらに、専属画工付工場を名古屋に設立させ、それと同時に、三年の歳月を掛けてその名画工らに現状よりも好条件な専属契約を締結して名古屋に集め、千人規模の工場とさせた」

- * 7 ガイドブック「界限創世 やきものの未来へ」名古屋文化遺産活用実行委員会編（松岡氏ヒアリング (pp.14-pp.15) から）
- * 8 統計上は、愛知として出てくるが、その中には、瀬戸、常滑、名古屋などの産地の総計となっている。だが、置物に関して言えば、瀬戸が主力産地であると推察できる。
- * 9 「文化のみち榎木館」は、輸出陶磁器の加工完成間屋として財を成した井元為三郎氏の邸宅であり、大正ロマンが漂う施設となっている。
- * 10 「旧豊田佐助邸」は、大正 12 年に豊田佐吉の弟で佐吉を支えた実業家である豊田佐助の旧邸宅。
- * 11 文化のみち界限の資源を回るイベントとして 1999 年より、毎年、文化の日に開催されている。
- * 12 名古屋市では、町並み保存地区内における建築物の修景基準等を定め、建築物等の修理・修景についての相談に応じ、必要と認められる場合には、その経費の一部を補助している。
- * 13 「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」であり、2012 年の成果物のひとつが「界限創世 やきものの未来へ」である。
- * 14 金腐らしとは、目的となる部分に、アスファルトを油で溶いたものやパラフィンなどで素描する技法である。
- * 15 例えば、池上惇 (2010) 「現代の都市・農村の再生と広域発展—文化資源を活かす地域再生の構想—」地域生活学研究、では職人技の学習・交流と地域再生の重要性について言及している。

参考文献／資料

- 1) 宮地英敏『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会、2008.
- 2) 近藤進『1955（昭和 30）年頃の名古屋陶磁器会館と日本陶磁器輸出組合』陶業史こぼれ話（番外編）、JAPPI NL、2010.9
- 3) 鷲主泰久『陶磁器雑記帖』鳴海製陶株式会社、1982.
- 4) 田村哲「大倉イズム：製陶大国の礎—父・孫兵衛の志と子・和親らが継いだ功労—」『大倉山論集』

(第五十四輯)、財団法人大倉精神文化研究所、
2008.

- 5) 西尾典祐『東区榑木町界限』健友館、2003.
- 6) 創立二十周年記念「二十年史」名古屋輸出陶磁器協
同組合
- 7) 「五十年史」名古屋輸出陶磁器協同組合、1999.
- 8) 「四十七年史」日本陶磁器輸出組合、1999.
- 9) 「名古屋陶磁器上絵付技術コンクール受賞者名簿」(昭
和 33 年～昭和 60 年度)
- 10) ガイドブック「界限創世 やきものの未来へ」名古屋
文化遺産活用実行委員会編

* 調査協力 財団法人名古屋陶磁器会館

* 当該資料に基づき、2012 年 9 月 8 日、国際文化政策
研究教育学主催「文化政策セミナー」にて発表。